

# ひのきとひなげし

宮沢賢治

青空文庫



ひなげしはみんなまつ赤に燃えあがり、めいめい風にぐらぐらゆれて、息もつけないようでした。そのひなげしのうしろの方で、やつぱり風に髪かみもからだも、いちめんもまれて立ちながら若いひのきが云いいました。

「おまえたちはみんなまつ赤な帆船ほふねでね、いまがあらしのところなんだ」

「いやあだ、あたしら、そんな帆船やなんかじゃないわ。せだけ高くてばかあなひのき。」ひなげしどもは、みんないつしよに云いいました。

「そして向うに居るのはな、もうみがきたて燃えたての銅あかがねづくり

のいきものなんだ。」

「いやあだ、お日さま、そんなあかがねなんかじゃないわ。せだ  
け高くてばかあなひのき。」ひなげしどもはみんないつしよさけに叫  
びます。

ところがこのときお日さまは、さっさっさつと大きな呼吸を四  
五へんついてるり色をした山に入ってしまった。

風が一そうはげしくなつてひのきもまるで青黒馬あおうまのしつぽのよ  
う、ひなげしどもはみな熱病にかかったよう、てんでに何かうわ  
ごごとを、南の風に云つたのですが風はてんから相手にせずどしど  
し向うへかけぬけます。

ひなげしどもはそこですこうししずまりました。東には大きな

立派な雲の峰みねが少し青ざめて四つならんで立ちました。

いちばん小さいひなげしが、ひとりでこそそそ云いました。

「ああつまらないつまらない、もう一生合唱手コーラスだわ。いちど女王スターにしてくれたら、あしたは死んでもいいんだけど。」

となりの黒斑くろぶちのはいった花がすぐ引きとつて云いました。

「それはもちろんあたしもそうよ。だってスターにならなくたってどうせあしたは死ぬんだわ。」

「あら、いくらスターでなくつてもあなたの位立派ならもうそれだけで沢山たくさんだわ。」

「うそうそ。とてもつまんない。そりやあたしいくらかあなたよりあたしの方がいいわねえ。わたしもやっぱりそう思つてよ。け

どテクラさんどうでしょう。まるで及びもつかないわ。青いチョッキの虻さんでも黄のだんだらの蜂めまでみなまつさきにあつちへ行くわ。」

向うの葵の花壇から悪魔が小さな蛙にばけて、ベートーベンの着たような青いフロツクコートを羽織りそれに新月よりもけだか**いばら娘**に仕立てた自分の弟子の手を引いて、大変あわてた風をしてやって来たのです。

「や、道をまちがえたかな。それとも地図が違つてるか。失敗。失敗。はて、一寸聞いて見よう。もしもし、美容術のうちはどこで見たかね。」

ひなげしはあんまり立派なばらの娘を見、又美容術と聞いたの

で、みんなドキツとしましたが、誰たれもはずかしがって返事をしませんでした。悪魔の蛙がばらの娘に云いました。

「ははあ、この辺のひなげしどもはみんなつんぼか何かだな。それに全然無学だな。」

娘にばけた悪魔の弟子はお口をちよつと三角にしていかにもすなおにうなずきました。

スター  
女王のテクラが、もう非常な勇気で云いました。

「何かご用でいらつしやいますか。」

「あ、これは。ええ、一寸ちよつとおたずねいたしますが、美容院はどちらでしようか。」

「さあ、あいにくとそういうところ存じませんでございます。一

体それがこの近所にでもございましょうか。」

「それはもちろん。現に私のこのむすめなど、前は尖<sup>とが</sup>ったおかしなもんでずいぶん心配しましたがかれこれ三度助手のお方に来ていただいてすっかり術をほどこしましてとにかく今はあなた方ともご交際なぞ願えばねがえるようなわけ、あす紐<sup>ニューヨーク</sup>育に連れてきますのでちよつとお礼に出ましたので。では。」

「あ、一寸。一寸お待ち下さいませ。その美容術の先生はどこへでもご出張なさいますかしら。」

「しましような」

「それでは誠<sup>まこと</sup>になんですがお序<sup>ついで</sup>での節、こちらへもお廻<sup>まわ</sup>りねがえませんかでしょうか。」

「そう。しかし私はその先生の書生というでもありません。けれども、しかしとにかくそう云いましょう。おい。行こう。さよなら。」

悪魔は娘の手をひいて、向うのどてのかげまで行くと片眼かためをつぶつて云いました。

「お前はこれで帰つてよし。そしてキャベジと鮎ふなとをな灰で煮込にこんでおいてくれ。ではおれは今度は医者だから。」といいながらすつかり小さな白い鬚ひげの医者にばけました。悪魔の弟子はさつそく大きな雀すずめの形になってぼろんと飛んで行きました。

東の雲のみねはだんだん高く、だんだん白くなって、いまは空の頂上まで届くほどです。

悪魔は急いでひなげしの所へやって参りました。

「ええと、この辺じやと云われたが、どうも門へひょうさつ標札も出し

てないというようなあんばいだ。一寸たずねますが、ひなげし

んたちのおすまいはどの辺ですかな。」

かしこ賢いテクラがドキドキシながら云いました。

「あの、ひなげしは手前でもでございます。どなたでいらつしや  
いますか。」

「そう、わしは先刻はくしやく伯爵はくしやくからごことづて言伝ことづてになつた医者ですがね

。」

「それは失礼いたしました。椅子いすもございませんがまあどうぞこ

ちらへ。そして私共は立派になれましょうか。」

「なりますね。まあ三服でちよつとさつきのみすめぐらいといふところ。しかし薬は高いから。」

ひなげしはみんな顔色を変えてためいきをつきました。テクラがたずねました。

「一体どれ位でございましょう。」

「左様。お一人が五ビルです。」

ひなげしはしいんとしてしまいました。お医者 of 悪魔もあごのひげをひねったまましいんとして空をみあげています。雲のみねはだんだん崩れてくずしずかな金いろにかがやき、そおつと、北の方へ流れ出しました。

ひなげしはやっぱりしいんとしています。お医者もじつとやつ

ぱりおひげをにぎったきり、花壇の遠くの方などはもうほんやりと藍あゐいろです。そのとき風が来ましたのでひなげしどもはちよつとざわつとなりました。

お医者もちらつと眼めをうごかしたようでしたがまもなくやつぱり前のようしいんと静まり返っています。

その時一番小さいひなげしが、思い切つたように云いました。

「お医者さん。わたくしおあしなんか一文もないのよ。けども少したてばあたしの頭にあへん亜片ができるのよ。それをみんなあげることにしてはいけなくつて。」

「ほう。亜片かね。あんまり間には合わないけれどもとにかくその薬はわしの方では要いるんでね。よし。いかにも承知した。証文

を書きなさい。」

するとみんながまるで一ぺんに叫びました。

「私もどうかそうお願いいたします。どうか私もそうお願い致します。」

お医者 はまるで困ったというように額に皺しわをよせて考えていましたが、

「仕方ない。よかろう。何もかもみな慈善じぜんのためじゃ。承知した。証文を書きなさい。」

さあ大変だあたし字なんか書けないわとひなげしどもがみんな  
一諸いっしょに思つたとき悪魔のお医者 はもう持つて来た鞆かばんから印刷した証書を沢山出しました。そして笑つて云いました。

「ではそのわしがこの紙をひとつぱらぱらめくるからみんないっしよにこう云いなさい。」

亜片はみんな差しあげ候と、<sup>そうろう</sup>

まあよかつたとひなげしどもはみんないちどにざわつきました。お医者者は立つて云いました。

「では」ぱらぱらぱらぱら、

「亜片はみんな差しあげ候。」

「よろしい。早速薬をあげる。一服、二服、三服とな。まずわたしがここで第一服の呪文<sup>じゅもん</sup>をうたう。するとここらの空気にな。

きらきら赤い波がたつ。それをみんなで呑むんだな。」

悪魔のお医者はとてもふしぎない声でおかしな歌をやりまし

た。

「まひるの草木と石土を 照らさんことを怠りし 赤きひかりは  
集つどい来てなすすべしらに漂ただよえよ。」

するとほんとうにそこらのもう浅黄あさぎいろになった空気あきのなかに見えるか見えないような赤い光がかすかな波なみになってゆれました。ひなげしどもはじぶんこそいちばん美しくなろうと一生けん命その風を吸ひいました。

悪魔のお医者いしやはきつと立たつてこれを見渡みわたしていましたがその光が消きえてしまふとまた云いいました。

「では第二服 まひるの草木と石土を 照らさんことを怠りし  
黄わうなるひかりは集つどい来てなすすべしらに漂ただよえよ」

空気へうすい蜜みつのような色がちらちら波になりました。ひなげしはまた一生けん命です。

「では第三服」とお医者さんが云おうとしたときでした。

「おおい、お医者や、あんまり変な声を出してくれるなよ。ここは、セントジョバンニ様のお庭だからな。」ひのきが高く叫びました。

その時風がザアツとやって来ました。ひのきが高く叫びました。「こうらにせ医者。まてっ。」

すると医者はいへんあわてて、まるでのろしのように急に立ちあがって、滅めつぽう法界かいもなく大きく黒くなって、途とほう方もない方へ飛んで行ってしまいました。その足さきはまるで釘くぎ抜きぬのように

とが  
尖り黒い 診察靴 もけむりのように消えたのです。

ひなげしはみんなあつけにとられてほかつとそらをながめています。

ひのきがそこで云いました。

「もう一足でおまえたちみんな頭をばりばり食われるところだった。」

「それだつていいじゃあないの。おせつかいのひのき」

もうまつ黒に見えるひなげしどもはみんな怒つて云いました。

「そうじゃあないで。おまえたちが青いけし坊主のまんまでがり

がり食われてしまったらもう来年はここへは草が生えるだけ、それに第一スターになりたいなんておまえたち、スターて何だか知

りもしない癖くせに。スターというのはな、本当は天てんじょう井いのお星さまのことなんだ。そらあすこへもうお出になつてゐる。もすこしたてばそらいちめんにおでました。そうそうオールスターキャストトというだろう。オールスターキャストというのがつまりそれだ。つまり双子ふたご星座様は双子星座様のところにレオーノ様はレオーノ様のところに、ちゃんと定さだまつた場所でめいめいのきまつた光りようをなさるのがオールスターキャスト、な、ところがありがたいもんでスターになりたいなりたいたと云つてゐるおまえたちがそのままそつくりスターでな、おまけにオールスターキャストだといふことになつてある。それはこうだ。聴きけよ。

あめなる花をほしと云い

「この世の星を花という。」

「何を云つてゐるの。ばかひのき、けし坊主なんかになつてあたり生きていたくないわ。おまけにいまのおかしな声。悪魔のお方のとても足もとにもよりつけないわ。わあい、わあい、おせつかいの、おせつかいの、せい高ひのき」

けしはやっぱり怒つています。

けれども、もうその顔もみんなまつ黒に見えるのでした。それは雲の峯がみんな崩れて牛みたいな形になり、そらのあちこちに星がびかびかしたのです。

ひなげしは、みな、しいんとして居おりました。

ひのきは、まただまつて、夕がたのそらを仰ぎました。

西のそらは今はかがやきを納め、東の雲の峯はだんだん崩れて、そこからもう銀いろの一つ星もまたたき出しました。

# 青空文庫情報

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

1994（平成6）年6月5日13刷

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# ひのきとひなげし

宮沢賢治

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>